

JAMES STEVENSON

UPTOWN LOCAL, DOWNTOWN EXPRESS

大雪のニューヨークを歩くには

ジェームズ・ステvensン 常盤新平 訳



ON UPTOWN LOCAL, DOWNTOWN EXPRESS

大雪のニューヨークを歩くには

ジェイムズ・ステヴンソン

常盤新平 訳

筑摩書房



大雪のニューヨークを歩くには

著者 ジェイムズ・ステイヴンスン

訳者 常盤新平

一九八八年五月一〇日 初版第一刷発行

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 (編集) 二九四一六七一一 (営業) 二九一七六五一

振替 東京六四一一三三

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-480-83092-8 C0098

JAMES STEVENSON
UPTOWN LOCAL, DOWNTOWN EXPRESS

目次

歩道で	3
ごみ	8
雨宿り	16
ワジャバック	22
屋上	24
おおい、リーチ！	28
ブルックナー八角地帯	36
チョコレート	41
お金の足	49
ニューヨークのハーマン・メルヴィル	54

空の橋	116								
栈橋	113								
配管工のトラック	111								
ガリシさんの売店	108								
ウエストウェイはどこへ	104								
午前四時	100								
ブロンクス動物園	95								
家	92								
地下鉄の駅	88								
ノンパレイル	84								
八番街	82								
トラック	78								
サーカス・タイム	74								
さまざまな影	68								

大雪のニューヨークを歩くには 120

ハンツ・ポイント 122

ベルモント・ステークス 125

タンゴ・パレス 129

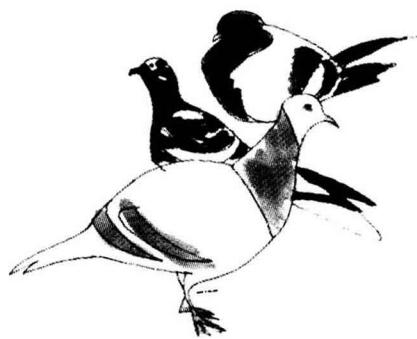
並木の保存 130

オフ・オフ・ブロードウェイ日記 133

目ざめ 148

アプタウン・ローカル、ダウntaxtown・エクスプレス 常盤新平 150

大雪のニューヨークを歩くには

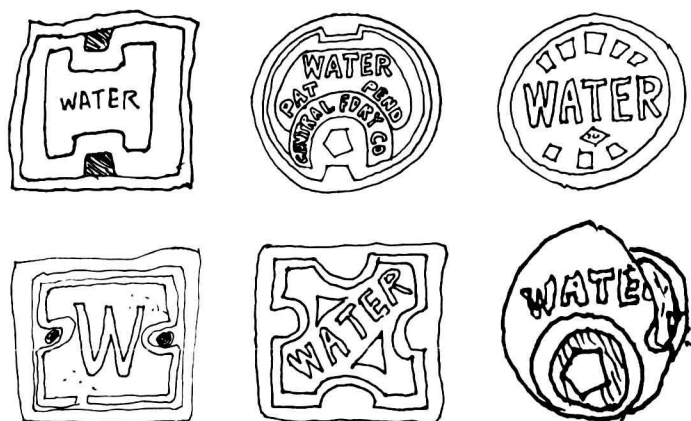


歩道で

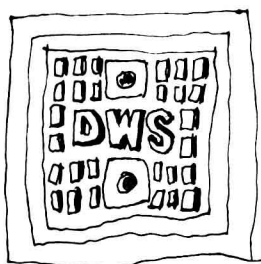
私がときどきやるように、下を向いて街をとほと歩いてみれば、フィルター付き煙草の吸殻や紙きれなどの屑にいやというほどお目にかかるが、楽しいものに出くわすこともよくある。

その一つ、歩道に埋めた、小さなマンホールの蓋。(上を向いて歩く人たちはこれに「つまずく」)。

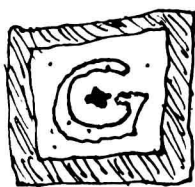
私にわかったもののなかには、燃料用送油管の栓がある。ガスや水を出したり止めたりするバルブの蓋、それから、もっと大きな蓋は下水管などいろいろな管の口を蔽っている。これらの蓋の総称はべつにない。蓋そのものが小さいから、車が通る路面のマンホールの蓋のような、鑑賞に耐える種類の芸術的な花やかさにはたいてい欠けているが、なりこそ小さいながら、簡潔な力強い自己主張をしている蓋がよくある。七十丁目台のアムステルダム・アヴェニューでは、二、三ブロック歩くうちに、浅浮彫り^{パツツ}、中浮彫り^{メツツ}、高浮彫り^{アルト・レリーフ}、そして年ふりた浅浮彫り^{ステイプ・アート}といった、多種多様の彫刻をつぎつぎに見かける。水道だけに限っても、つぎの形の蓋がある。



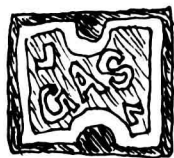
水道局のは、穴が二つあいていて、突起がいくつも整然と並んだ、大きな、よく目立つ蓋である。



バルブの栓にただ「G」とだけあるのは「ガス」のことだ。

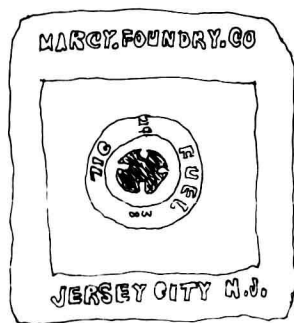


（右のような蓋のなかには、中央のコンクリート板のまわりに金属の枠をはめて、頭文字を削られてしまったようなものがある）。



実は、送油管の栓は実用一点張りになりがちで、面白味に欠けるきらいがある。

それを補ってあまりあるのが尊大にかまえている。たとえば、まんなかが真鍮でできているマーシー鋳物工場の四角な蓋。

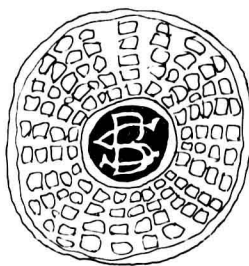


世の中でどんなお役に立っているのか、それがわからない蓋がたくさんある。七十五丁目とブロードウェイの北東の角にあたる歩道の「BPM」は見る人に不安感をあたえる。それが何なのかはわからないが、手を触れてはいけないことがわかる。



実をいうと、それは測量用のプレートで、「BPM」の頭文字は「ブロック・プレジデント・オブ・マンハッタン地区測量長」のことだ。

アムステルダム・アヴェニューには人騒が
せなほど不可解な蓋がある。



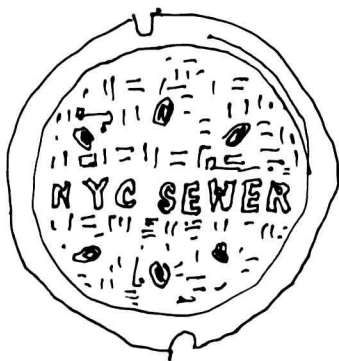
謎の「S」は下水道施設の頭文字かもしれない。



ところが、下水道施設だということが、明
明白々な蓋も歩道にある。



わけのわからぬ蓋には、大胆不敵なデザイ
ンが多い。たとえば、七十六丁目ハッペルと
いう蓋。



これは明らかに自称、蓋の貴族であって、俗物にありがちの欠点が出ている（「家柄は職業よりも大事」）。

私がとくに好きなのは七十五丁目でも、アムステルダム・アヴェニューのすぐ東側にあるやつで、べつに不可解なものではない。——思うに、それは故チャールズ・H・フォックス氏の遺影（直立した）のある納骨堂であるが——しかし、なんであろうと、私はたいへん気に入っている。

一九七八年



ごみ

ごみを好きだという人はほとんどいない。できれば早く、なるべくならほかの人に、遠くへ持っていつてもらいたいと思う。結局、ごみのことなど考えたくない。ひところ、ごみ処理の場所は、最近「環境」として知られるようになってきた周辺のもっぱら湿地帯に捨てると決まっていた。こういうやり方がマンハッタンをいまのような姿に変えてしまったが、こんな処理方法でよいという人はもういない。イースト・ブロンクスのイーストチェスター湾が何年も前からブロンクスのごみを始末する便利などころと思われてきたが、この何エーカーもの湿地帯が埋立地という不動産になって、いまや時代は変った。ベラム・ベイ・パークのはずれで、ハチンソン・リヴァー・パークウェイとブルックナー・エクスプレスウェイが交差する地点の東にあった巨大なごみ捨て場は横にひろがるのをやめ、かわって高層建築になった。先日、ひと目見ようと立ち寄ってみたら、十階建の高さの建物だった。

頭上の山の上で、何台ものトラックとブルドーザーが頂上をつくっている。トラックとブルドーザーは白い雲が動いているようなカモメの群の下で玩具のように見えた。ベース・キャンプ——小さな建物の集まり、砂と砂利と塩がまじった山、いろんな大きさの建設用の車——でぶら

ぶらしていると、白い衛生局のトラックがつきつぎにやってきて、山をのぼり、山をおりていった。まもなく、眼の青い、髪が半白の、一徹な感じのするエドワード・サンダが青と金のバッジを光らせ、緑の衛生局の帽子に制服、ゴム長靴をはき、うすい黄褐色のウィンドブレーカを着て現われ、このごみ処理場の現場主任だと自己紹介して握手した。まもなく、感じのいい男で、楽しい話相手であることがわかった。「これでもニューヨークで一番大きなごみ処理場じゃないんですよ」と彼はいくらか弁解するように言った。「最大のはスタテン島にあります。しかし、たぶん高さなら最高でしょう」

「ごみ処理場というんですか？」と私は訊いてみた。

「皆さんがごみ処理場と呼んでますね」とサンダ氏は答えた。「しかし、市当局は『埋立^{サニタリーランド}地』と呼びたいんですよ。理由は、非常に高いからで——ただいまのところ、標高約九十八フットで——ここは八十エーカーしかなく、われわれが使っているのは、そのうちの七十エーカーです。狭すぎるから、上へ上へと行かなければならない。ここに集まったごみはいま五〇〇万トンといったところでしょうか。われわれは土木技師の指示で仕事をします。彼らが場所を選び、傾斜度を決めます」。頂上のほうを指さすと、そこでは、巨大なブルドーザーがごみでかためた断崖から新しいごみを押しだし、いったん後退して、また押しだしていた。「あれはまだ完成していないごみの堤で、六十トンのブルドーザーで、切^{カット}って固めているんです。『切る』^{カッティング}というのは、ごみを押しだして落とすことで、それから後退しながら、固めてゆくんです。そのあとで松根油か、われわれが『風船ガム』^{バルーンガム}とっている、甘い香りの殺菌剤を散布して、砂を一面にけるのです」

サンダが山頂に行ってみましようかと誘ってくれたので、白い小型トラック（これは四輪駆動ですよ）とサンダが言った）に乗りこみ、つぎのように書いてあるドアを閉めた。

環境保護局

ニューヨーク市

衛生部

廃棄物処理課

サンダがエンジンをふかし、山のふもとにむかった。「あれは管理事務所の小屋です」と前方を指さした。「あの小屋で作業員がシャワーを浴びたり着替えをしたりするんです。ここで働いているのは四十人から五十人で、一定しません。衛生部の職員や給油係、修理工、クレーン操縦員がいます。パワーシャベルやダンプカー、ブルドーザー、トラクターから消防車、散水車まで、装備はさまざまで、散水車は消火と殺菌剤散布のためです。実は、ごみの火事を消すには、ブルドーザーでごみを埋めてしまうしか方法がありません。あっちには電子計量器があつて、はいってくるごみを測っています。一日に処理するごみの量は三〇〇台分でしょうか。われわれが扱うのは市のごみと個人のごみだけです——工場などのごみは特別の許可がないかぎり、扱いません」

トラックは坂をのぼりはじめ、北面の道をあがっていった。左手に団地群「アパート・シタディ」の南端の塔がいくつも見える。ごみはロング・アイランド岬「サウンド・ポイント」に住む人たちの視界をさえぎっているらしい。「われわれが気に入らないんですよ」とサンダが言った。「しかし、彼らはごみそのものの上に住んでいることを知らないんです。あそこにごみを捨てなかったら、彼らの住まいもないはずなんです。とにかく、これが終われば、市はこの土地の美化をはかり、地元の人たちと協議して、彼らが利用できるもの——地元の希望に従って——にすることになっています」

